

描かれた水口祭り・焼米搗き

畠山 豊

はじめに

ここ一〇年程の間に勤務先の博物館で四季耕作図を取り上げた展示を三度ほど手懸けたので、「はじめに」として、その折りのことなどから述べてみたい。

最初に手懸けたのは「多摩の民具——江戸時代の農具」展（一九九一年^①）で、この時には東京多摩地域に残る近世の紀年銘農具、唐箕・万石・唐臼・千歯扱き等を紹介し、あわせて関連資料として佐川和裕氏の報告にある神奈川県中郡大磯町黒岩の守屋家掛幅を展示した。本展の展示意図は、当時盛んだった紀年銘民具研究に沿った史料としての位置付けを目指したもので、守屋家掛幅については安政六年（一八五九）銘のあることに加え、描かれた内容の在り地・蓋然性の検討を目的とした。後者については小川直之氏にその検討を依頼し、同氏は神奈川県下の豊富な民俗調査経験に基づき検討を試み、加えて渡部武氏の本邦四季耕作図研究の成果から、本図も「中国に端を発する耕織図に系譜する農耕図をアレンジ……」したものであると推定している^②。なお筆者は、本展開催前に国立歴史民俗博物館の

岩井宏實氏が主催した「絵馬にみる日本常民生活史の研究」（一九八四年）に参加する機会を得、当時埼玉県下の絵馬研究を精力的に進めていた大久根茂氏の発言に、生業図絵馬の中に粉本によるもののあること、の指摘を印象深く記憶している。

二度目に手懸けた展示は「農耕図と農耕具」展（一九九三年⁴）で、当時、農具研究に絵画資料を援用し成果を上げていた河野通明氏に多大な助言を受けた。本展では、農業・農具研究への絵画資料の援用の有効性を窺うものと、有銘農具等の代表的資料の紹介を眼目とした。この展示は今考えると、当時私どもの館がより広い範囲からの資料収集が可能だったことから、それなりのことではなかったものと思っっているが、問題がやや拡散し過ぎたきらいがなくもない。次のような資料を展示した。歴史研究における農業図の代表として知られていた既知の「たはらかさね耕作絵巻」三本すべて、中国の耕織図としての「康熙帝御製耕織図」、中国に端を発する我が国四季耕作図中のものである狩野永翁筆「四季耕作図屏風」及び既白筆「蚕織耕絵巻」、本邦農作業図の最古のものと思われる「堀家本四季農耕絵巻」、在地性を窺えるものとしての渡辺始興筆「四季耕作図屏風」及び千輝玉斎筆「豊年満作図襖絵」、絵馬・浮世絵等に絵手本として多用された『絵本通宝志』、近世勸農書としての『成形図説』、明治農具図として「岐阜県農具図」及び「東京府下六郡農具図」等々に加え、有銘唐箕として最古の明和四年（一七六七）銘京都府船井郡八木町旧在唐箕、天和二年（一六八二）等の銘がある大阪市平野区杭全神社蔵の御田植神事に使われる模製農具（犁・鋤等）等々、また栃木県宇都宮市瓦谷町上蔵祭礼の屋台欄間に彫刻した四季耕作図他である。なお本展を前に私どもと同じ管内にある町田市立国際版画美術館において「近世日本絵画と画譜・絵手本展」（一九九〇年⁵）があり、耕織図も多数紹介され美術の方から高い評価を受け、担当学芸員の誘いもあり筆者もオープン前に少し細かく見る機会があったが、私自身の意識が低かったせいも、日本の農具・民具研究には直接的には結びつかないように思った。

三度目の展示は二〇〇〇年新春の「民具と生活 小特集・四季耕作図」展⁶で、この展示では「農耕図と農耕具」展

以降に館蔵資料とすることができた「たはらかさね耕作絵巻」の一本及び「康熙帝御製耕織図」に加え、「農耕図と農耕具」展開催中に新たに所在を知ることができた神奈川県横須賀市追浜「平田家蔵四季耕作図屏風」(六曲一双)を紹介した。本展では河野通明氏により「たはらかさね耕作絵巻」既知三本が各種四季耕作図の中でも特に為政者の子女に国の基となる農業について教える鑑戒画であること(7)の位置付けができ、また渡部武氏により「康熙帝御製耕織図」の各種異本と国内での開板版について紹介がなされた(8)。「平田家蔵四季耕作図屏風」については、展示前の河野通明氏と筆者の調査により強い在地性を窺うことができ、その詳細については河野氏に論考がある(9)。ちなみに本屏風中の在地性を窺うものの一つとして、先述守屋家掛幅中にも見える粃均しと思われる苗代近くで長柄の箒を持つ農夫の場面があり、その解析については佐川和裕氏の報告の通りでありすでに論考もある(10)。

以上三度の展示で有銘資料の史料としての位置付けや絵画資料の援用について様々な試みをしてきたが、後者について筆者がこしばらく特に注意をはらっているのは、何が描かれているかということであり、そこに在地性を窺えるものがないか、そして中でも信仰儀礼の描写に注目している。例えば「農耕図と農耕具」展で紹介した渡辺始興筆「四季耕作図屏風」左隻三扇下部の苗代図中には、水口祭りに際するお札を挟んだ幣串が見える。また、ここ三年ほど東京・埼玉・神奈川の学芸員仲間や河野通明氏、渡部武氏と続けている「絵画資料を読む会」で精査することができた、横浜市歴史博物館蔵の「四季農耕図巻(青亀斎模写)」冒頭には焼米搗き図が描かれている(11)。この図については当初、なぜ冒頭に白搗き場面があるのか分からなかったのだが、後日、河野氏から焼米搗きではないかという示唆を受けたものである。焼米は水口祭りに供える幣串の札内に納めるもので、余った種粃を焼き白で搗いて粃殻を外し作る。大分前置きが長くなったが、以上が本日の私の小報告の発端で、以下描かれた水口祭りと焼米搗きについて述べてみたい。

一 水口祭り

稲作研究は、日本の民俗学に大きな足跡を残した柳田国男氏が深く関心をもった領域で、田の神の去来や田の神の穀霊と祖霊としての性格などが検討され、氏は晩年に『海上の道』⁽¹²⁾として日本人の稲作生活とその由来をまとめていゝる。また稲作儀礼については、氏の門下生による研究成果も少なくなく、その集大成としては倉田一郎氏の『農と民俗学』⁽¹³⁾や平山敏治郎氏の「農耕儀礼（稲作工程歳時曆）」⁽¹⁴⁾、伊藤幹治氏の『稲作儀礼の研究——日琉同祖論の再検討』⁽¹⁵⁾などが知られ、伊藤氏の著作は刊行されてからすでに三〇年近くになるが、おおむねその頃から坪井洋文氏に代表される我が国における非稲作文化の検討が始まったことは周知のとおりである。

ここでは主に伊藤氏によって、稲作儀礼と水口祭りについて見てみたい。日本の稲作儀礼の構成は、大きく五つの要素に分けられている。すなわち、①予祝儀礼、②播種儀礼、③田植儀礼、④生育儀礼、⑤収穫儀礼、である。水口祭りは、このうちの②の播種儀礼に位置する。まず水口祭りの事例を、手元の資料からあらかじめ数例ほど挙げておこう。

宮崎県 播種儀礼 苗代に粃種を播くことは稲の一生のはじまりであるだけに、それを祝う儀礼がいろいろみられる。種播きの日にはタネマキダゴという白い米の団子を作って苗代の水口に近い畦の上に供え、家の人も食べ、近隣にも配る。これは県南の諸県地方から宮崎市の周辺にかけて広くみられた。これをマツキヤゲダゴ（播き上げ団子）・ナワシロダゴともいってフキの広い葉にのせて畦に供えて種を播く人が拝む。宮崎市の生目・大塚町原などではこのタネマキダゴのそばに、その年の小正月に田の神に供える小豆粥に添えた田の神箸（柳の枝で作る）をとっておいて、その柳のケズリカケの箸を田に立てて拝んだ。（後略）⁽¹⁶⁾

愛媛県 水口祭 苗代ごしらえができると、水口の所に土壇を設けたり、巻藁を作つて置いたりして祭場を設け、そこに植物の枝を立てたり、野草を根こじにしたものを置いたり、また神札を竹に挟んで立てるなどし、米・干柿・たつくり・神酒などを供えて豊作を祈ることをする。いわゆるサンバイサンと呼ぶ田の神を勧請して祀るのであるが、これをミトマツリ・ミナクチマツリなどと呼んでいる。〈中略〉事例13 越智郡菊間町では、水口にのぶどうの蔓を輪にして置く。その輪の中に実のよくついたシシャブの枝を立てる。焼米を供え豊作を祈る。苗代後は部落中が神社でオコモリをするのをモミマキ祝いという。同郡大西町も同様の風である。「鳥のお札」と呼ぶ牛王神札に焼米を包んで、竹に挟み立てている。この水口祭をタナダテと呼んでおり、焼米を作ることをオタナダテゴシラエといったりもする。⁽¹⁷⁾

京都府・南山城 水口祭り 4月末〜5月初 苗代に種つけした粃を播いた日に、水を取り入れる水口に花やゴーサン（牛玉）をまつり、焼米等を供えて粃の発芽と成育を祈った。水口にたてる花はツツジが一般的である。〈中略〉また、水口に供えられた焼米等を子供がタバツテ（もらつて）歩いたことは、今は行なわれないが伝承としてはのこっている。山城町綺田では、湧出宮の御田植で授けられてきたオカギと菜の花をたて、フキの葉にヤリゴメ（玄米をいったもの）をのせて供えた。この日子供達は農家をまわり、ヤリゴメくれへんかったらドンガメ（石） 田んかになにされるド とはやし、ヤリゴメをもらい歩くのがたのしみだったという。⁽¹⁸⁾

静岡県（伊豆） 苗作り 〈前略〉播種の作業が終ると小正月の成り木責めに用いたダイノコンゴを二本ミノグチに立てる。そのダイノコンゴの頭に十字形の割れ目を入れてある。これに相模大山の阿夫利神社からいただいたカラスマブリ（鳥守り）の護符または伊勢皇大神宮のお札をはさむ。それから種粃の余りをもつて製したヤコメ（焼米）を、トリノクチと称して供える。中伊豆町白岩では、ミノグチにツツジの花枝を差し立てる。

〈後略〉⁽¹⁹⁾

群馬県 水口祭り 苗代の水口に小正月の粥かき棒、はらみ箸その他を供えて、豊作を祈った。陸苗代の場合も同様である。粥かき棒、はらみ箸については、年中行事の項に詳しい。その他、焼米（利根郡水上町小仁田、吾妻郡嬭恋村三原、群馬郡蔵沢村水沼）、〈中略〉吾妻・群馬・碓氷郡・高崎市など碓氷峠熊野神社の信仰圏内ではその御師の配る烏牛王札などを供えた。焼米を新治郡須川ではカラスの焼米といい、水上町須田貝ではこの行為を烏の口を焼くといい、子供に焼米を与え「烏を追ってくれ」と頼んだ。〈後略〉²⁰⁾

岩手県 水口まつり 種蒔きが卒わると、その余った稲穂を臼でついて粃殻を取り去り、センバン（鉄製の炒器）又は鍋で炒つて所謂、炒米を作る。この炒米を約二十粒宛、三寸四方位の半紙に粉葉を包むように折って包んだものを、萱の二尺位の長さのものに挟み、水口の真中にこれをさし、その両側に萱だけのものを数本、適当な間隔にさし、その根本に杉の葉をそえる。そして「鳥が苗代に入らないように守って下され」といしながら、別に用意してきた炒米を粒でその附近にまいて、苗の成長とともに鳥の害から守って下さるよう手を合わして拝む。これを「水口まつり」という。「水口」又は「とりの口」ともいい、この祭りを「とりの口まつり」とも呼んでいる。〈後略〉²¹⁾

伊藤幹治氏は前掲書で、播種儀礼の構成要素の分布図を示し、「儀礼内容は、地域ごとに若干の変差を示してはいるが、日本列島にほぼ等質的に分布している」とし、その基本型について次のように述べている。

〔基本型〕 粃蒔きするとき、苗代田の一部（水口・中央・畦）に、自然木（萱・柳・栗・檜・卯木・竹・榊・松・樅・椎）の枝、または、これと並行・独立して、季節の花（桜・山吹・ツツジ・椿）などを挿し、これに焼米・洗米を供えて祀る。

そして伊藤氏は、この基本型に検討を加え、「播種儀礼を特徴づける構成要素として、次の諸点を抽出することができる」とする。

(1) 農耕神＝田の神の依り代としての自然木の枝、(2) 田の神の依り代もしくは供え物としての焼米、(3) 正月行事との関連、(4) 年占的性格(豊凶占い)、(5) 子供組による焼米もらいの慣行、(6) 禁忌

なお伊藤氏が摘出した諸点のうちの(1)～(4)では、氏は依り代としての自然木が鳥獣駆除として使われることや、供物の焼米を鳥に啄ませることに触れ、後者についてはその予祝性に注目している。以上は、先に示した水口祭りの事例に照らしても、意が尽くされたものと思う。なお、これに若干を付け加えるならば、小川直之氏の摘み田稲作にも水口祭りがあるという指摘に注意してよいだろう。

ところで筆者はかつて勤務先の博物館で「護符・祈りの版画——神札と寺札」(一九八一年)⁽²²⁾と題し展示を行ない、各種お札の中でも所謂牛玉札が全国的に分布するなど特異な位置を占めていることに気付き、その後さらに「牛玉寶印 祈りと誓いの呪符」(一九九一年)⁽²³⁾と題し展示を行なったことがある。牛玉札は悔化会やオコナイなど祈年^{としごい}の祭りで版行(書の牛玉といい手書きのものもある)されるもので、一般に起請文の料紙として使われることで知られるが、一方で水口祭りに際し幣串に挟み苗代に立てられることが列島各地で行なわれている。特に奈良・京都・滋賀・福井などオコナイ行事が盛んな地や、先の水口祭りの事例紹介中の愛媛・群馬の例、また岩手・宮城などの東北地方などでも見られる。オコナイで作成される牛玉札が水口祭りに使われることは、オコナイが新春に行なわれるという正月行事との関連、オコナイで祈願する五穀豊穡の予祝との関連、また悔化会・オコナイで除災の呪物となる牛玉杖と水口祭りに際し田の神の依り代となる自然木との関係など、かなりの課題を孕んでいるように思われる。なお牛玉札の牛玉(牛王とも書かれる)は、牛の内臓に宿るといふ万能の高貴薬で、これを印肉に溶き混ぜ押捺することにより、呪符としてのいっそうの靈験を増すとされる。

二 焼米搗き

焼米及び焼米搗きについては、それが水口祭りの部分要素であるためか特に論じたものは少ない。既出のものとしては太郎良裕子・定森由紀子氏の論考⁽²⁴⁾が知られるが、太郎良氏はノートルダム聖心女子大学食品栄養学科の所属ということで食物としての焼米の記述が主となっている。宮下知良氏の「焼米考」⁽²⁵⁾は一種独特の性格を持つもので、ある種の伝承論あるいは儀礼や事象が伝えられることと伝えられないことの意味を、焼米を素材として水口祭りの焼米のみに限定せず論じたものといつてよく、焼米について丹念な資料探索と検討を行なっている。氏は焼米について、呼称・製法・食法・日常の食・晴の食物・二種の焼米・種焼米・原型・炭化米と項目立てをして論じ、その思考の理解には、やや困難を伴うものがあるが、一方で幾つかのヒントや新たな問題に気付かされた。

ここでも水口祭りの事例紹介に倣い、あらかじめ幾つかの事例を挙げておこう。

香川県 大川郡長尾町多和・前山地区 種まき 〈前略〉こうして、苗代の種まきが終ると、ゴーサン、花、米、炒り米を供えて、「千石も万石もになりますように、家も栄えますようにお願いします。」と言って祈る。このいり米というのは、黒豆と大豆、家によつてはモチバナを炒つて作る。〈中略〉この日、子供たちは苗代を作ったところを訪ねて豆をもらつて歩く。そして、「いり米くれんとこの苗代は、どんがねじれ、かめねじれ、後からたにしが横ねじれ。」とはやす。だから、子供にはなるだけ多く豆を食べさせるようにする。〈中略〉まき残った種は焼き米にする。焼き米というのは、粃を水につけて、ぬれたままの粃をイリガワラで炒り、それをトオケの中へ入れてふたをし、全部炒りあがったらタチウスの中でつき、ついてはさび、ついてはさびして粃⁽²⁶⁾がらをよりわけながら作る。できた焼き米は神棚へ供え、家族が塩味をつけて茶をかけて食べる。〈後略〉

神奈川県 五月の行事 〈前略〉横浜市緑区荏田町柚木では、播種が終わると、焼米（蒸した糯米に大豆を炒って混ぜたものだという）を紙にのせて、田の畦に供えた。これを子供が食べると、「どこそこのこぞうが食った。よかった、よかった。」と喜び、多くの人々に食べられることを期待していた。川崎市川崎区大師河原では、正月十五日に使った箸をとっておいて先を割り、そこに大山や武州御岳山のお札に包んだ焼米をさして、田の水口に立てた。葉山町長柄では残りの種粃をふかして大豆を入れた焼米を作り、正月十一日に神に供えたアポ・ヒエボの木に大山さまや御岳山のお札をはさんだものとか、ツツジの木などと一緒に、苗代の水口に供えた。〈中略〉三浦市和田や毘沙門などでは、播いた残りの粃を立杵についてから焼米にし、水口（ここには神さんがいるという）に三か所供え、荒神や仏さんにもザツキに入れて供えた。そして種播き正月といって、二、三日仕事を休んだという。この時の焼米に限って、立杵でついたという所はあちこちにある。⁽²⁷⁾

岩手県 残り種の処理 「水口まつり」に使う炒米は少量で足りるが、その残余は糯・粳を区別して一緒にまとめ、そうしたものを蒸して乾燥し、臼に入れて手杵でつくか、水車で、そのとり入れ水を弱くして強くなくつき、粃殻をとって蒸米を作る。強く搗くとくだけてしまう。こうして作った蒸米は炒米よりやわらかであり、甘みもあるので、お茶菓子の代りにも用いられ、子供達には五勺位も紙袋に入れて与えると、一日の間食には十分であり、又これで酒を作るとうまいと伝えている。〈後略〉⁽²⁸⁾

水口祭りの焼米について渉獵して筆者が今回特に気になったのは、その製法の脱穀として立ち臼で搗くということ。脱穀の字義は、国語辞典では「穂から実をはずすこと」と「粃から殻をはずすこと」が並立して書かれているが、私は前者を脱粒とし脱穀は殻はずしと区分しておきたい。神戸市桜が丘遺跡出土国宝袈裟禪文銅鐸の搗き臼図が、春成秀爾氏は脱穀場面とし、大方の支持を受けており筆者もそうだろうと思うが、それにしても木搗臼や唐臼の普及前の脱穀はどのようなものであったか。粃摺臼の古いものとしては『枕草子』の記述が知られるが、広く普及してい

たとは思えない⁽²⁹⁾。事典類には簡単に搗き臼の使用としているが、今一つ納得がゆかない。食事毎に米食をしていたわけではないだろうから、単純に労働力の多寡からは論ぜられないように思う。取り敢えずは、神話に歴史が反映されるように儀礼に過去が反映されるとし、焼米搗きの立ち臼を見ておくべきか。今一つ、水口祭りの焼米に使われる粃が種粃であることに宮下氏も特に注目し触れているが、ここにも大きな問題が孕まれているように思われる。少し余計なことをいえば坪井洋文氏は非稲作文化について論じる一方で、種粃についても多くを論じている。

水口祭りや焼米については、考古学からの発言も少なくない。例えば中村慎一氏の「農耕の祭り⁽³⁰⁾」では、中国や韓国の事例など東アジアからの観点に立ち弥生時代の鳥形木製品について述べ、また「オハゼと水口の祭り」の項などは興味深く読めるのだが、民俗事例から辿ろうとしている筆者には今のところ「興味深い」という程度の発言しかできない。例えば杉山晃一氏による『稲のまつり アジアの村々を訪ねて⁽³¹⁾』によれば、アジアというまとまりの中にあるりながらの稲の神観や稲作儀礼の偏差が目についてならない。

三 描かれた水口祭り

水口祭りの画像資料は八点を確認したが、意外と少なかったのは資料探索が充分でなかったことによるものかと思われる。すでに述べてあるように水口祭りには幾つかの構成要素があるが、画像として拾いだしたのは幣串に折り畳んだお札を挟み苗代に立てるものばかりであった。以下、個々について述べてみよう。

1. 大和侍農絵づくし 菱川師宣 延宝八年(一六八〇) 西尾市岩瀬文庫蔵

上段の文章は、「すでに夏にもなれば、雨を乞ふて苗代をおろし、早稲・晩稲□□の種を蒔く。鳥の降りきて餌ば

みをすれば、その用心にとて縄を張り、まじないのふだを水のおもてに挿す 蓬萊の田つくりや きみの国たから」。

この図は、焼米搗き図の次に位置する。一頁に一図で描かれる。右上の田の畦には、種籾籠に手を入れ今にも摺み出そうとしている男。下部の三人の母子は昼間持ち。脇の手持ち籠の中に見える粒々は種籾か。籠横の風呂敷包みの中は、曲げ物の桶で弁当だろう。苗代の中に立つ縄を張り巡らした棒と二本の幣串のお札は、上部の説明どおり。菱川師宣（?—一六九四）は、江戸初期の画家で浮世絵の確立者として知られる。安房国平群郡本郷村（千葉県安房郡鋸南町保田）に生まれ、若くして江戸に出て画業に励み、版本の挿絵画家として活躍し、やがて一枚絵の揃い物を出版、これが浮世絵に展開する。出身地の鋸南町に隣接する富津市の『富津市史 通史』⁽³²⁾の民俗編には、水口祭りについて次のように記されている。

・タネマイ 〈前略〉三月の春ビヤリを終え、オビシヤも終えると、四月の初旬にタネマイ（種蒔き）をする。

〈中略〉各家では、タネマイを終えると、榊の枝に幣束をつけ、苗代のミノテ（水口）に立て、オサゴ（米）を供えて祀った。〈後略〉

現在残る民俗がどの程度過去へ遡るか不明だが、師宣の出身地近くにも幣串を立てる風はあったようで興味深い。

本図は、今回の涉獵で一番古い水口祭り図となる。「大和侍農絵づくし」を粉本としたものに、「四季耕作子供遊戯図巻」⁽³³⁾がある。なお「大和侍農絵づくし」の書誌については松平進氏が詳しい⁽³⁴⁾。

2. 絵本土農工商 西川祐信 元禄前後か 東京国立博物館蔵

鳥除けの縄を張った棒の立つ苗代田の隅に、お札を挟んだ幣串が見える。縄には幣状のものが付けられ、今ある銀紙の短冊を付けた鳥除けのように見える。西川祐信（一六七一一七五〇）は、関西浮世絵界の第一人者。河野通明氏は、本書の刊行意図について、大意、江戸時代の身分制度の中でそれぞれの職業に専心することが世に貢献し繁栄

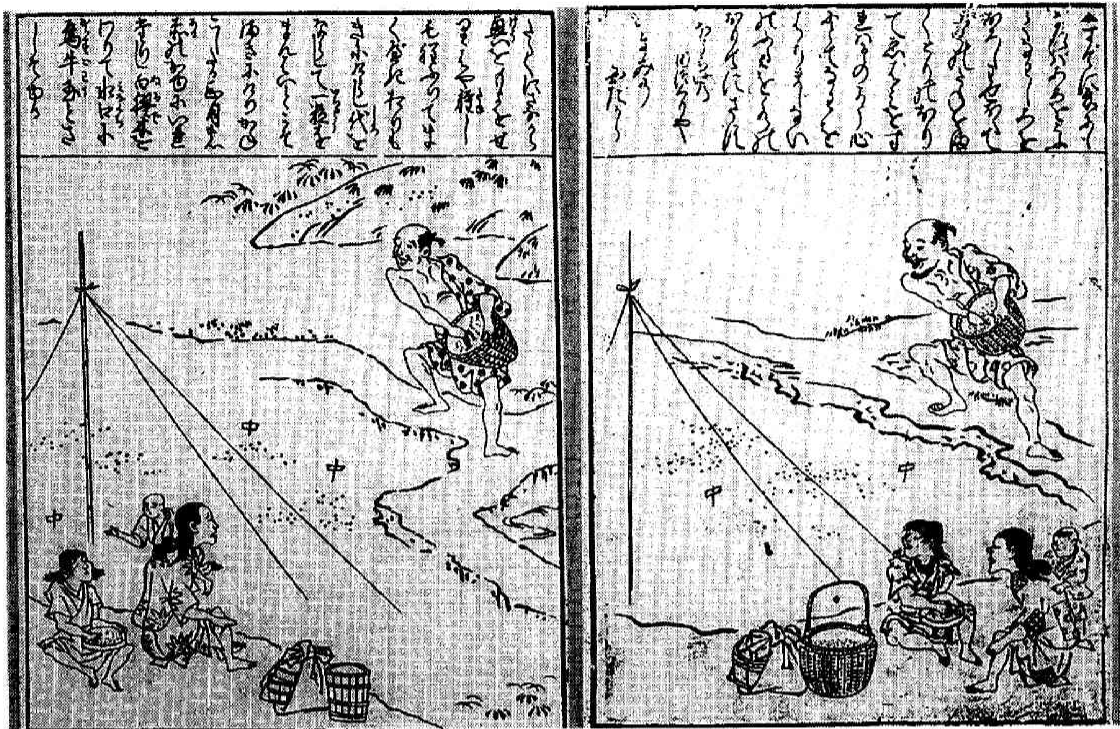


図1 『大和侍農絵づくし』（菱川師宣筆、西尾市岩瀬文庫蔵、左）と「大和耕作絵抄」（石川流宣筆、たばこと塩の博物館蔵、右）

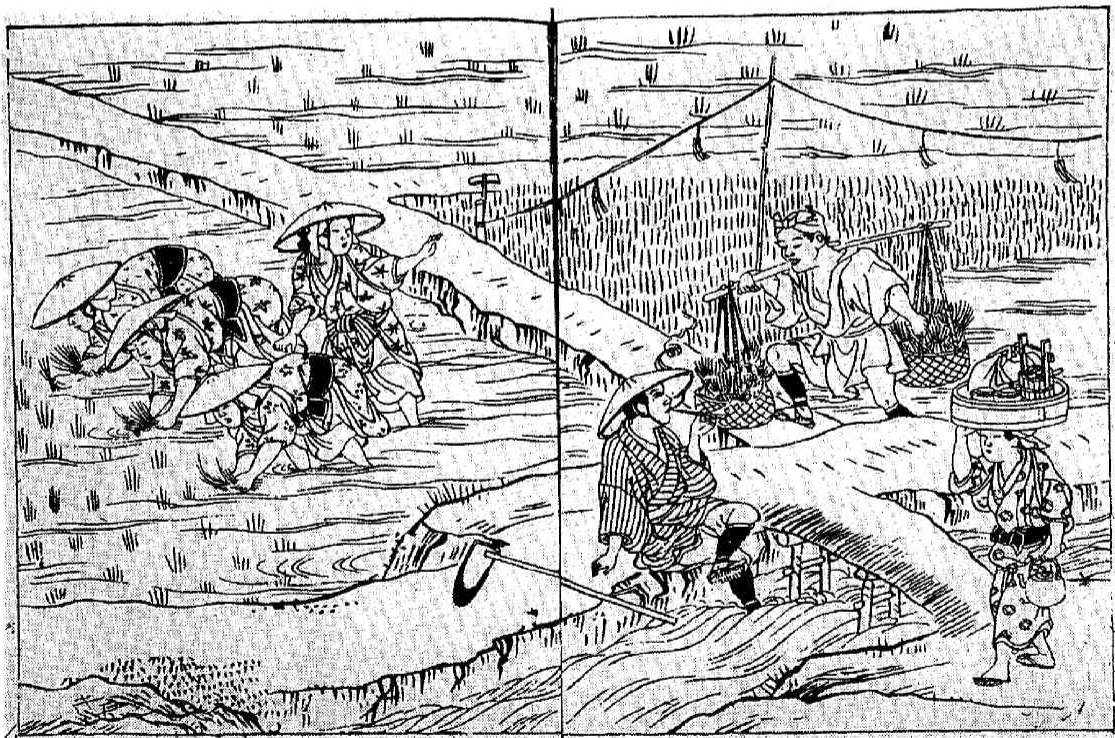


図2 『絵本土農工商』（西川祐信筆、東京国立博物館蔵）

する、と説いたものとしている。⁽³⁵⁾ なお「絵本土農工商」の書誌については松平進氏が詳しい。⁽³⁶⁾

3. 四季耕作子供遊戯図巻 水竇和繼 元禄一六年（一七〇三） 神奈川大学日本常民文化研究所蔵

焼米搗き図に続いて位置するが、図柄は「大和侍農絵づくし」を粉本としており、その異同は昼間持ちが母子二人となり、脇の柄のある種籾籠と風呂敷包みの曲げ物の弁当はまったく同一。作者の水竇和繼については不明だが、河野通明氏は和繼を江戸町方の旦那衆で菱川派の門人とし、本図は子供のための鑑戒画で、このような図が江戸庶民の間にも定着していたことを指摘している。⁽³⁷⁾

4. 大和耕作絵抄 石川流宣^{とものぶ} 宝永五年（一七〇八） たばこと塩の博物館蔵

上段左頁の文章は、「はや種しも程ふりて、蒔くべき折りも来にけらし。代を均して一粒を万倍とこそ時きにけり。かねこしたる正月の、赤の粥に入れたりし、ぬるでを割りて水口に、烏牛玉と挿し添ゆる」。これも焼米搗き図の次に位置する。絵柄は「大和侍農絵づくし」を粉本としたもの。見開きに描かれており、右頁は出起こしで、鋤を使う男、作業を見る老人と男児、鍬を使う男が描かれる。左頁は「大和侍農絵づくし」とほぼ同じ図柄で、籠の種籾を握む男、昼間持ちの母子三人、鳥除けの縄を張り巡らした棒と三本の幣串が描かれているが、昼間持ちの母子三人の座る位置が逆になり、また種籾を入れた籠が桶となっている。石川流宣は、生没年不明の浮世絵師で江戸の人という。画風は菱川師宣に近いが、師承関係は不明とされる。上段の文の、赤の粥は小豆粥のことと思われ、ぬるでは漆科の落葉木で小豆粥の粥掻き棒に使われたことになる。水口祭りの幣串に粥掻き棒が使われる例は、水口祭りの事例紹介をした群馬の例中のとおり。烏牛玉は紀州熊野三社で出される牛玉札だが分社からも版行されており、何処のものか不明だが一八世紀初頭に牛玉札が水口祭りに使われていたことが分かる。

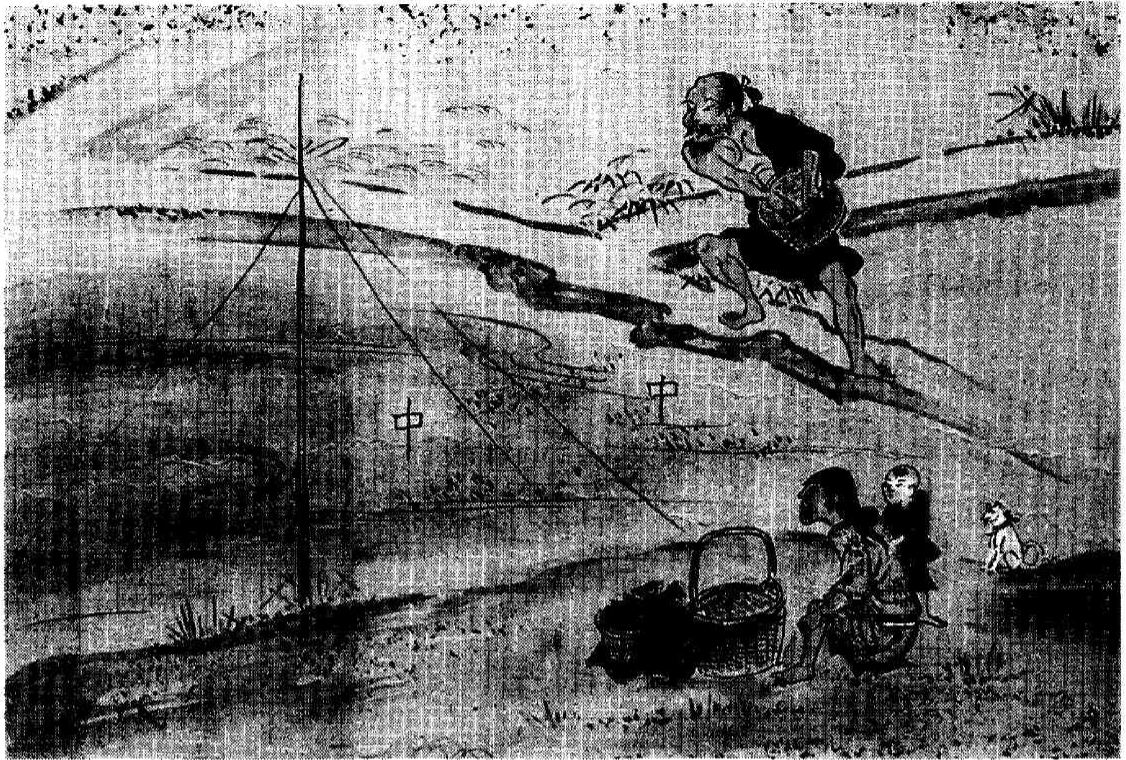


図3 「四季耕作子供遊戯図巻」(水竇和継筆、神奈川県日本常民文化研究所蔵)



図4 「絵本通寶志」(橘守国筆、静岡県農業試験場蔵)

5. 絵本通寶志 橘守国 享保一四年（一七二九）

静岡県農業試験場蔵

種籾浸し図に続いて見開きの左頁に描かれる。図は、畦に立つ二人の男が種籾籠の籾を掴み蒔こうとしており、苗代にはお札を挟む幣串一本が描かれ、「大和侍農絵づくし」の水口祭り図にもある鳥除けの縄張りと思えるものが見えるが、本図では水面に這わせるかのように描かれている。右頁には亀を持つ子供が描かれている。水口祭りにお札を挟む幣串を立てることは近畿地方にも広く見られ、水口祭りの事例紹介の京都の例の通りであり、あわせて同例に亀に関する歌のあることにも注意できる。橘守国（一六七九—一七四八）は近世大阪の絵師、狩野探幽の高弟鶴沢探山に学び、二〇種近い絵手本の作家として知られる。河野通明氏によれば「絵本通寶志」中の農具図は、大阪地方の在来農具と矛盾なく、大阪近郊農村を取材写生したものである。また同氏は、「絵本通寶志」を手本とした屏風・絵馬・刊行物を一五種紹介しており、これらの所在地は九州から東北にまで及ぶ⁽³⁸⁾。

6. 四季耕作図屏風 渡辺始興 一八世紀

兵庫県個人蔵

六曲一双屏風の左隻三扇下部の苗代図中に、苗の中に立てられたお札を挟む幣串一本が見える。興味深いのは水口祭りに立てられる幣串のお札に牛玉札が多く使われることを考えるならば、同中程の萱ぶき屋根の家の軒下に貼られたお札で右端に見える三行書きの横長のものは牛玉札に多く、また右隻三扇の農家軒下に見えるお札中程の菱形のものは京都感心院（八坂神社）発行の独特の牛玉札で、さらに右端の面は齋藤純氏（天理大学）によれば京都広隆寺頒布の鬼面だろうという。渡辺始興（一六八三—一七五五）は京都に生まれ、初め狩野派に学び次いで尾形光琳に学び写生をよくしたという。本屏風も京都近郊を写生したものか。本図は在地性を窺える農村風景図としては出色のものといえ、生業図としての検討が望まれる。本図については、明珍健二氏が詳しい⁽³⁹⁾。

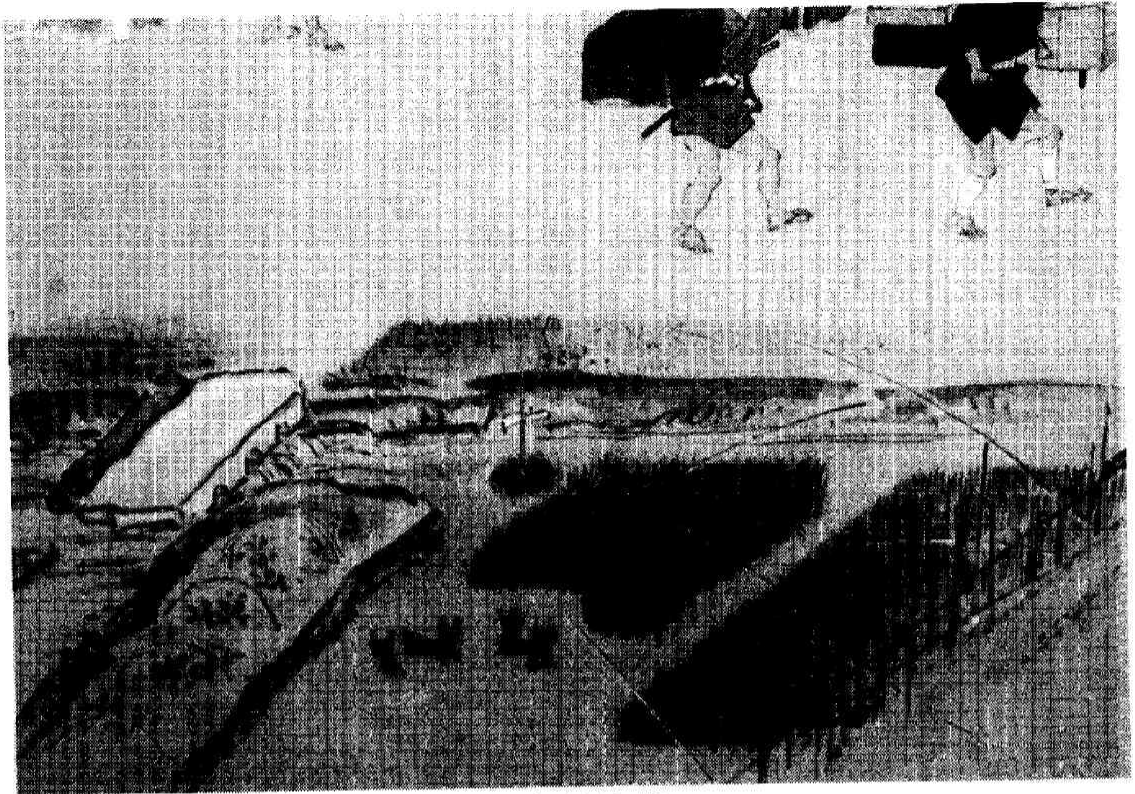


図5 「四季耕作図屏風」(渡辺始興筆、兵庫県個人蔵)

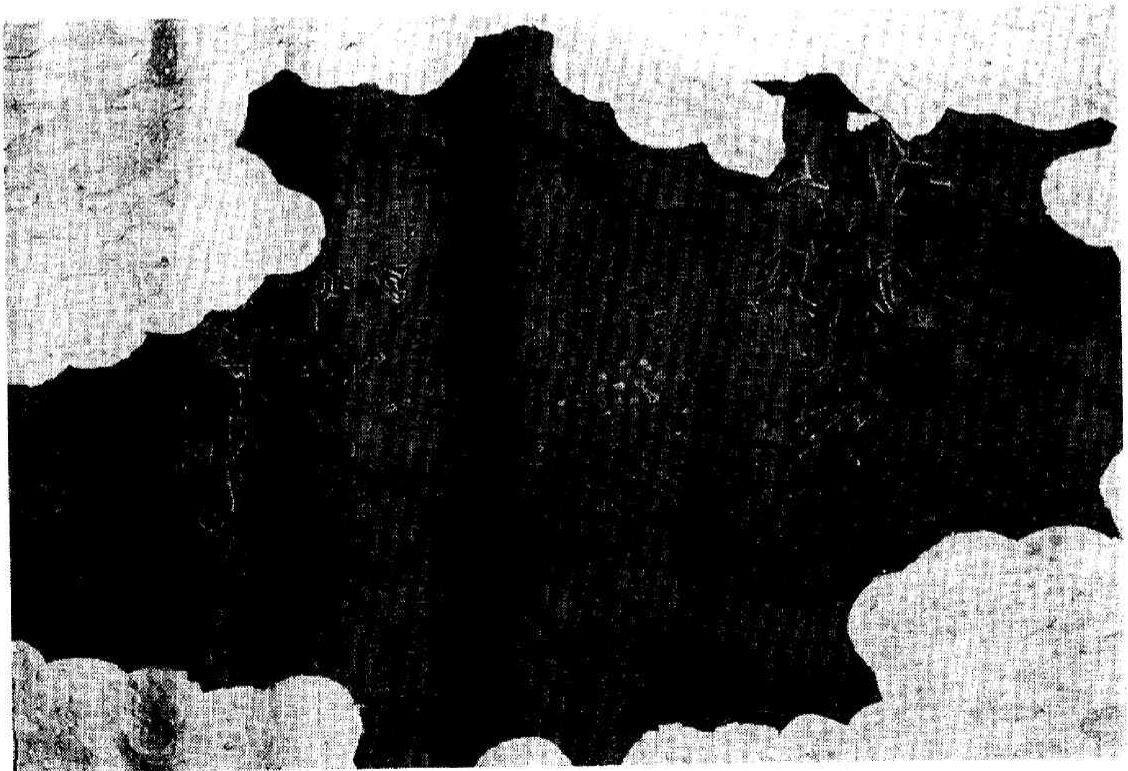


図6 「農耕図貼交屏風」(大阪府個人蔵)

描かれた水口祭り・焼米搗き

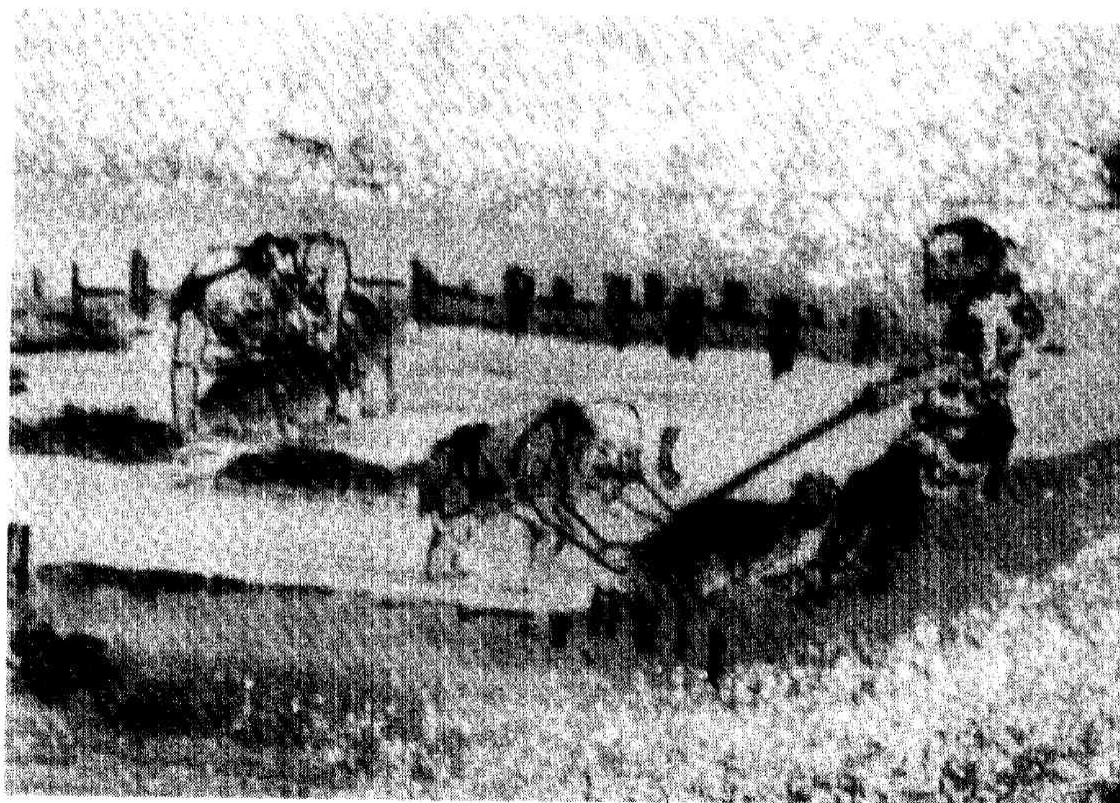
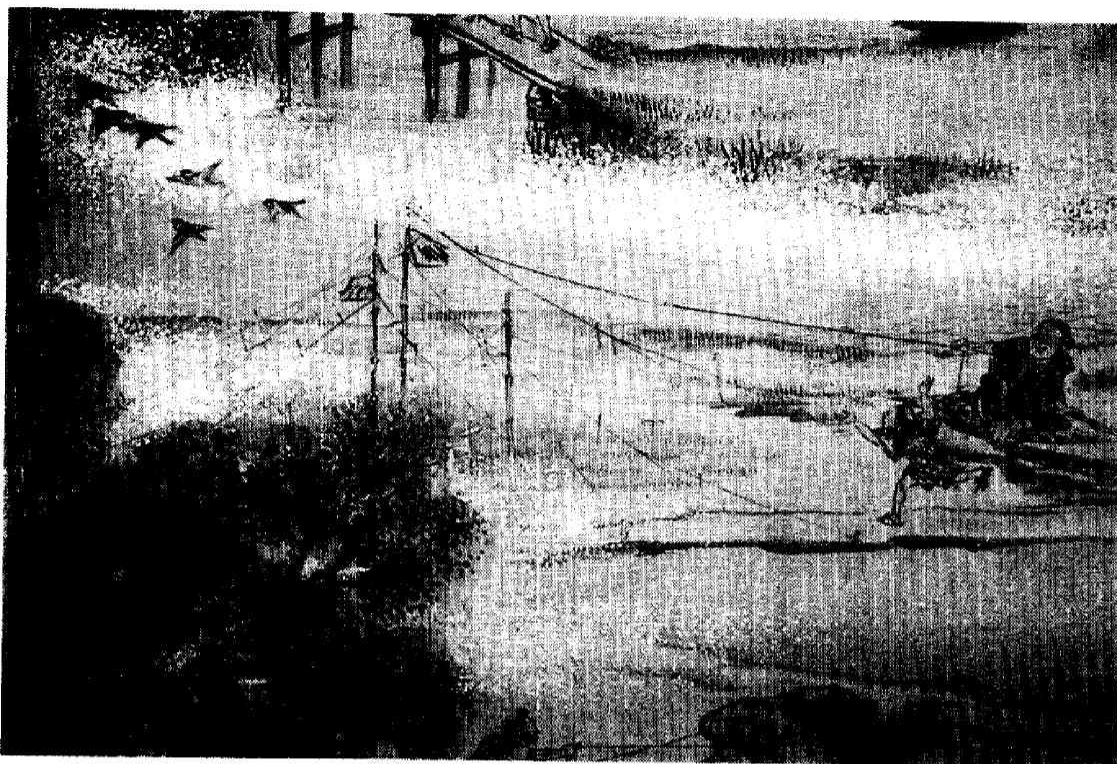


図7・図8 「四季耕作図屏風」(石垣東山筆、個人蔵)

7. 農耕図貼交屏風 不明 不明 大阪市個人蔵

二曲貼交屏風で、一扇中図の播種・苗代起こし場面中に土壇(?)に立てられた二本のお札を挟む幣串が見える。作者及び現資料の経歴は不明だが、一部を宮崎安貞の「農業全書」挿図を粉本としている。⁽⁴⁾二本の幣串を並立させる例は知らない。

8. 四季耕作図屏風 石垣東山 幕末—明治初 大阪市個人蔵

右隻四扇中程の烏脅しのための鳴子の立つ苗代中にお札を挟んだ幣串が見られる。石垣東山(一八〇四—七六)は越前敦賀出身の越前鞠山藩士で藩主に随伴し来阪、のちに画道に専念し七二歳で大阪南新町で没。本図に描かれた農具類は比較的正確といい、農作業と共に年中行事なども描かれ月次絵の伝統が強く出た写実的作品とされる。⁽⁴⁾それだけに、どの地を描いたものか分かれればより興味深い。なお、三扇の侵種場面には幣串を銜える男が描かれている。

四 描かれた焼米搗き

焼米搗き図については五点を確認し、図はないものの「町田市立博物館本たはらかさね耕作絵巻」の詞書中に焼米の語の記載があり紹介する。焼米搗き図は、浸種図の次、苗代に立つ護符図の前に描かれる。女性が立杵を使い搗くが、粉本により描かれたためかすべての臼の胴が括れており、また女性の杵を持たない手は臼の縁を掴んでいる。焼米搗きに際し臼の縁を掴む民俗例は、今のところ確認していない。

1. 大和侍農絵づくし 菱川師宣 延宝八年(一六八〇) 西尾市岩瀬文庫蔵

描かれた水口祭り・焼米搗き



図9 『大和侍農絵づくし』(菱川師宣筆、西尾市岩瀬文庫蔵)



図10 『絵本土農工商』(西川祐信筆、東京国立博物館蔵)

見開きの右頁に種粃浸しのための俵の受け渡し、左頁に屋外で三人の女性が立杵を使い臼搗きをしている場面が描かれている。女達は、片手に杵を持ち、片手で臼の縁を掴んでいる。上段の文は、「百姓はまづ農具を整え、春ともなれば水に種を浸し、一粒万倍と祝いて、余りし粃を火にあて搗きて、これを祝う。これをたな米という。〔後略〕」。たな米は、種米。師宣の出身地千葉県安房郡鋸南町に隣接する富津市の市史の年中行事には次の記載が見えるので、師宣も子供の頃あるいは焼米を貰い歩いたのかもしれない。

タネマイ 四月中～下旬、苗代に種粃をまく。この時ヤングメ（焼米）を作り、苗代の神様に供えその発芽を祈念した。富津・飯野地区では、昭和十年代までこの日子供たちはヤングメをもらい歩き、宿で煮てもらって食べた。もらいにゆく時、「たねやんごめくんろ くんたとくなくなかへ ござろほっこむぞ」とはやしたという⁽⁴²⁾。

水口祭りに焼米・炒り米を作り供え食する所は広範にわたり、その際に臼で立杵を使い搗くことが行なわれる。

『神奈川県史 各論編五 民俗』の記述では、水口祭りに供える焼米に限っては立杵を使ったとあるのは興味深い。

2. 絵本士農工商 西川祐信 元禄前後か 東京国立博物館蔵

見開きの右頁に、屋内で二人の女が立杵で臼を搗いている。一人の女は子供を背負い、今一人の女は片手に杵を持ち片手で臼の縁を掴み、脇に子供が佇む。入口には、亀を持つ男児。左頁には浸種が描かれる。

3. 四季耕作子供遊戯図巻 水寶和繼 元禄一六年（一七〇三） 神奈川大学日本常民文化研究所蔵

屋外で立杵で臼を搗く三人の女が描かれ、これも「大和侍農絵づくし」を粉本としたもの。

4. 大和耕作絵抄 石川流宣 宝永五年（一七〇八） たばこと塩の博物館蔵

描かれた水口祭り・焼米搗き



図11 「四季耕作子供遊戯図巻」(水竇和継筆、神奈川大学日本常民文化研究所蔵)



図12 「大和耕作絵抄」(石川流宣筆、たばこと塩の博物館蔵)



图13 「四季農耕図卷」(横浜歴史博物館蔵)

見開きの左頁に屋外で立杵で臼を搗く三人が、右頁に種籾俵の受け渡しをする男二人と子供の手を引き種籾俵を担ぐ男が描かれる。一部を除き「大和侍農絵づくし」とほぼ同じ図柄であり、臼を搗く三人は姿勢も同じで、背景の屋内にはどちらにも笠と鍬が見える。「大和侍農絵づくし」を粉本としたもの。上段の文章は、「〈前略〉彼岸きて、種をひやすも色々に、粳・糯や早稲・晩稲、祝い初めてん種米の、騒ぎ賑めく嫁娘、臼ばた叩くひと節に、なお音やしき鶯菜……」。

5. たはらかさね耕作絵巻 江戸前期か 町田市立博物館蔵 文のみ

「たはらかさね耕作絵巻」は鑑戒画の一つで、皇子また將軍・大名の子女に農業の苦難を説き為政者としての仁慈を教え諭すことに供された童児用教育絵本で、前述の「四季耕作子供遊戯図巻」はその庶民版とされる。本絵巻は上下二巻からなり、その上巻に挿図はないものの以下の文があり、焼米の風のあったことを窺える。

〈前略〉 去年の田面のかりかふもまだ くち残るおりからに田なつ米を水に ひたしそのもえ出るをまちつけて
なハしろにまきほとこしきなえに なれと心をいるれハむら里のわらハベ ともたなやきこめをたまハラすハな
ハし ろに石亀をはなたんといふほとにたな つこめのやき米をたかひにくバるを さたまれることにするなり
されば 〈後略〉

なお、これに続き苗代の煩いとして石亀が入り込み泥土を掻き回し、鳥が田螺を取ろうとして踏み荒らすことをあげ、それを防ぐために苗代の上に縄を張り網をひき又は鳴子を結びつけるとあり、すでに紹介した水口祭り図に当たるものが説かれている。⁽¹⁴⁾

6. 四季農耕図巻 青亀斎模写 文化十一年(一八一四)〈原作は狩野玉燕で享保八年(一七二三)〉 横浜

屋外で二人の女が、立杵を使い臼を搗き、杵を持たない方の片手は臼の縁を握む。青亀齋は東海道戸塚宿で紺屋を営み、隠居後に狩野派の絵師に師事したという。本絵巻の巻末に狩野玉燕の作を模写したことが記されている。⁽⁴⁵⁾元図がなく異同が不明だが、戸塚宿のある横浜市域や神奈川県域の焼米搗きについては、すでに事例紹介した通り盛んで、あるいは写生したものかもしれない。現戸塚区に隣接する藤沢市には、焼米搗きが芸能として今に残っているという。なお『神奈川県史 民俗』に焼米を磨り臼で引き割ったという例が記載されているが、頻度の高いものとは思えない。

おわりに

近年画像資料の読み取りが盛んに行なわれ、筆者もまた農業・農具について民俗の観点から試みているものである。ここでは水口祭りと焼米搗きについて検討してみたが、結局のところ蓋然性が問題となり検証に困難が少なくない。近世絵画史の専門家の一人が歴史学者他がいう蓋然性について、「そもそも絵というものは、絵空事という通りで」と惚けていたのを印象的に記憶している。しかしながら、そうした中でも弛まず検証を続けることがより大きな稔りを与えてくれるものと思っている。

水口祭りと焼米搗きの画像資料収集及び読み下しについては、河野通明氏に多大な教示を受けた。また千葉県下の水口祭りおよび焼米については榎本美香氏、『師宣祐信絵本書誌』の所在については浅野秀剛氏と湯浅淑子氏に教示を受けた。記して謝したい。

註

- (1) 『多摩の民具——江戸時代の農具』(町田市立博物館、一九九一年)。
- (2) 渡部武「中国農書「耕織図」の流伝とその影響について」(『東海大学紀要 文学部第四六輯』東海大学、一九八六年)。
- (3) 小川直之「四季耕作図」の描写と系譜」註(1) 図録に収録。
- (4) 『農耕図と農耕具』(町田市立博物館、一九九三年)。
- (5) 『近世日本絵画と画譜・絵手本展』(町田市立国際版画美術館、一九九〇年)。
- (6) 『民具と生活 小特集・四季耕作図』(リーフレット、町田市立博物館、二〇〇〇年)。
- (7) 河野通明「町田市立博物館蔵「たはらかさね耕作絵巻」について」(『たはらかさね耕作絵巻 康熙帝御製耕織図』町田市立博物館、二〇〇〇年)。
- (8) 渡部武「清代の焦秉貞画『御製耕織図』とその系譜」(『たはらかさね耕作絵巻 康熙帝御製耕織図』町田市立博物館、二〇〇〇年)。
- (9) 河野通明「中林湘雲筆「四季耕作図屏風」の基礎的検討」(『歴史と民俗』一七、平凡社、二〇〇一年)。
- (10) 佐川和裕「守屋家所蔵「四季耕作図」について」(『民具マンスリー』三三、四、神奈川大学日本常民文化研究所、二〇〇〇年)。
- (11) 『横浜市歴史博物館「収蔵資料展Ⅱ」』(横浜市歴史博物館、一九九九年)。
- (12) 柳田国男『海上の道』(筑摩書房、一九六一年)。
- (13) 倉田一郎『農と民俗学』(生活社、一九四四年)。
- (14) 平山敏治郎「農耕儀礼(稲作工程歳時暦)」(『郷土研究講座』第五巻、角川書店、一九五八年。のち『歳時習俗考』所収、法政大学出版社、一九八四年)。
- (15) 伊藤幹治『稲作儀礼の研究——日琉同祖論の再検討』(而立書房、一九七四年)。
- (16) 『宮崎県史 資料編 民俗1』(宮崎県、一九九二年)。
- (17) 『愛媛県史 民俗 上』(愛媛県、一九八三年)。

- (18) 『祈りとくらし』(京都府立山城郷土資料館、一九八四年)。
- (19) 『静岡県史 資料編二三 民俗一』(静岡県、一九八九年)。
- (20) 『群馬県史 資料編二五 民俗1』(群馬県、一九八四年)。
- (21) 『岩手県史 第十一巻 民俗篇』(岩手県、一九六五年)。
- (22) 『護符・祈りの版画——神札と寺札』(町田市立博物館、一九八一年)。
- (23) 『牛玉寶印——祈りと誓いの呪符』(町田市立博物館、一九九一年)。
- (24) 太郎良裕子・定森由紀子「香川県に伝承される炒り米と焼米——大川郡長尾町・志度町の事例より」(『岡山民俗』二〇五、岡山民俗学会、一九九六年)。
- (25) 宮下知良「焼米考」(『静岡県民俗学会誌』第一三号、静岡県民俗学会、一九九三年)。
- (26) 『香川県史一四 民俗』(香川県、一九八五年)。
- (27) 『神奈川県史 各論編五 民俗』(神奈川県、一九七七年)。
- (28) 註(21)前掲書。
- (29) 河野通明「平安時代の糴摺白」(『古代中世の社会と国家』清文堂出版、一九九八年)。
- (30) 中村慎一「農耕の祭り」(『神と祭り』小学館、一九九九年)。
- (31) 杉山晃一「稲のまつり アジアの村々を訪ねて」(平楽寺書店、一九九六年)。
- (32) 『富津市史 通史』(富津市、一九八二年)。
- (33) 河野通明「常民研本「四季耕作子供遊戯図巻」の成立」(『歴史と民俗』一五、神奈川大学日本常民文化研究所、一九九九年)。
- (34) 松平進『師宣祐信絵本書誌』(『日本書誌学大系57』青裳堂出版、一九八八年)。
- (35) 河野通明「西川祐信『絵本土農工商』農之部とその影響」(『歴史と民俗』一六、神奈川大学日本常民文化研究所、二〇〇〇年)。
- (36) 註(34)前掲書。

(37) 註(35)前掲書。

(38) 河野通明『絵本通宝志』を種本とする屏風・絵馬・刊行物〔『農耕図と農耕具』町田市立博物館、一九九三年〕。

(39) 『四季耕作図の世界——描かれた農事風景』(栗東歴史民俗博物館、一九九二年)。

(40) 『農耕の風景——摂津の四季耕作図』(吹田市立博物館、二〇〇〇年)。

(41) 註(40)前掲書。

(42) 註(32)前掲書。

(43) 成城大学民俗学研究所編『日本の食文化——昭和初期・全国食事習俗の記録』(岩崎美術社、一九九〇年。質問項目番号六七が焼米について)。

(44) 『たはらかさね耕作絵巻 康熙帝御製耕織図』(町田市立博物館、二〇〇〇年)。

(45) 註(11)前掲書。

追記

本稿を送付後、長谷川雪旦の「四季耕作図屏風(六曲一双)」(天保九年へ一八三八)佐賀県立博物館蔵)の焼き米搗き場面の失念に気付いた。雪旦(一七七八—一八四三)は、『江戸名所図会』の挿し絵を担当した絵師として知られる。本「四季耕作図屏風」は相模国鎌倉郡玉縄領渡内村(現藤沢市)の名主福原高峰の屋敷を描いたものと推定され、右隻四扇に種粃の水浸のための運搬図と隣り合わせ、屋外で女性一人が横杵を使い胴の括れた臼を搗いている場面がある。本屏風については描写地や作画年代がはっきりしており、今後の描写内容の蓋然性の検討が待たれる(『江戸の絵師 雪旦・雪堤 その知られざる世界』展図録、江戸東京博物館、一九九七年、参照)。

(はたけやま・ゆたか 宗教民俗学・物質文化)